

## (1) 基本的に

病態は、中心線がズレていて、上衝した邪気が、首肩が硬くて下りられずに、頭の中で堂々巡りしている。それに連れられて、頭の中で言葉がグルグル堂々巡りしていることが多い。

自然人類学では、ヒトは直立二足歩行するサル。立った姿勢で重心となる丹田の真上に頭（百会）がないと、心が揺れやすいようだ。

他の疾患よりも、患者さんとコミュニケーションが上手くいくことが大切。話たがっている人の場合には、よく聞くことが大事で、話の邪魔にならないように施術方法を選ぶことも必要。また、施術か所を気にされる場合は、その日の施術は見合わせて、別の手段を考えた方がよい。特に、顔や頭、臀部、胸や下腹部など。患者さんの理解を取りながら、少しずつ進める。

環境が変えられればよいことも多い。逃げ出すことも選択肢の一つ。転地療法が効果的なこともある。転地するには、それまでの環境での色々な関係に一区切りを付ける（清算する）必要があるからではないかと思う。

体で感じていることを心に思い浮かべられない人が増えている。心で思っていることの90%近くが他人の言葉に由来しているのではないかとと思われるような人が多い。そういう人が病気になるということは、体の感じていることを思い浮かべられない心に対して、体が発する警戒警報なのかもしれない。

心に症状が出ているときは、体だけに症状が出るときよりも治りにくいことが多い。体だけの症状に見えても、心の症状があることも多い。心の症状が多くなるほど治りにくい。

しかし、病態を理解して少しずつ体のバランスを改善していくと、心の中の堂々巡りは消えていく。

「体で感じる」ことを「心で思える」ようにしていくと変化が早くなる。

## (2) ツボの出やすい所

### 1. 経絡

首肩が硬いと邪気が頭から下りにくいので、太陽経絡や表位を使って首肩を弛める。首肩では、後頭骨下縁～胸椎7。足太陽では、鍼なら陽大鐘、灸なら失眠・女室。手太陽では、手首から先、沢田流神門、後溪、少沢など。

上衝を下げるために陽明を使う。前頸部から鎖骨の周囲と、手足陽明では合谷、足三里。

立ち姿勢で重心の真上に頭が来るように、督脈・任脈・厥陰・少陽を使う。督脈では、肩胛骨下端より上の脳戸～至陽。任脈では、膻中～中完。厥陰では、内関、中封、太衝。少陽では、風池～横頸中央、風市～足陽関。督脈の関係からか、足太陽の承筋、承山。

### 2. 頭

頭はブヨブヨした所。正中線上では、神庭～百会～脳戸。目の延長線上では、頭臨泣～正宮～承靈。

### 3. その他

心に打撲を受けたような状態のときには、臍の周りにもツボが出る。

頭との上下対応で、尾骨の周りにもツボ。

古い病とも関係する。

## (3) 手順

### 1. 応急処置

応急処置は、ぐっすり眠れるようにする。

先ず手の末端に合谷→内関→中渚の順で強めに引き、頭首肩の熱い所を散鍼してから、頭のブヨブヨに刺鍼、首肩背の順でシコリを弛め、足の太陽→少陽→厥陰→陽明の順で刺鍼し、終わりに手甲に引く。

途中で眠くなったら、足の刺鍼は省略。

### 2. 慢性期

慢性期には、慢性期の型の後に灸するか、置鍼と灸を組み合わせる。置鍼と灸のときの手順は、座位で手末端に引き鍼の後に、頭に刺鍼。この頭の鍼は置鍼してもよい。その後、うつ伏せで古いツボに補の灸頭鍼をして、仰向けで体幹部から足の古いツボに補の灸。そのまま寝てもらうのがよいが、起きてもらうときには手の骨空・指端などに寫の灸。

## 要点

- ① 立位で重心の真上に頭がないと心は揺れる
- ② 中心軸を作り、肩首を弛め、上衝を下げる
- ③ 応急処置は、グッスリ眠れることを目指す